

■ 書 評 ■

《神経心理学コレクション》
音楽の神経心理学

緑川 晶●著

山鳥 重, 河村 満, 池田 学●シリーズ編集

東京女子医科大学名誉教授・神経内科／

メディカルクリニック柿の木坂院長 岩田 誠

以前から、いつかはこのタイトルで書かれるであろうことを期待していた著者の書物ということで、大きな期待を持って読み始めた途端、著者の語り口に引き込まれてしまった。私自身、音楽を愛する者の一人として常日ごろ思っていること、すなわち音楽とは多数の人々が同時に交流するコミュニケーションの最良の方法であるということを、この本の著者は、「はじめに」と題された冒頭の章で、実に鮮やかに示してくれたからである。これを読んだ私は、とっさに橘曙覧の歌「たのしみはそぞろ読みゆく書の中にわれとひとしきひとをみしとき」を思い出した。

音楽家であると同時に、神経心理学という神経科学分野の研究者でもある著者が本書において語るところには、音楽する者としての心情的な共感を感じるとともに、神経心理学に興味を抱き続けてきた者としての納得できる明快さを感じる。神経心理学の分野における音楽能力と脳機能との関係についての研究は、言語機能と脳の相関を探る研究、すなわち失語症の研究と同じくらの歴史的背景を有している。一般に、失語症の研究は、ブローカによる失語症患者タン氏の臨床病理対応研究に始

まるとされているが、それ以前にも、またそれ以後にも、今日流に言えば失語症であったと思われる患者の記載中に、言語機能は失われているながら音楽能力は保たれていたと記載されている記録が残っている。これらの記載を残した人々は、これを不思議なことだと思ったのに違いない。それが故にわざわざ記載したのであろう。それほど長い研究史があるにもかかわらず、言語能力の神経機構が次第に解明されてきているのに対し、音楽能力を実現している脳内神経機構に関しては、いまだに解明されたとは言い難い状態である。特に、音楽を実現する能力を大脳機能局在論で解明しようとする試みは、未だにはっきりした結論にたどりついていない。

そのような現状に対し、本書の著者は、現代のいわゆる“脳科学者”たちのような独断的な理論を振りかざすことなく、いまだわからないところをいまだわからないこととして、素直に示してくれている。そして、このわからない部分、すなわち今日の神経心理学的枠組みだけでは解明できない部分を、本書の著者は、ネオジャクソニズム(neojacksonism)的思考でとらえ直している。著者がいみじくも本書の冒頭に



示したごとく、元来、多くの人々が等しく参加する社会的コミュニケーション・システムであったはずの音楽活動が、今日のような演奏家と聴衆という二極化の下で営まれるようになったことは、明らかにジャクソン流の階層化が進んだことを示している。音楽能力の大脳局在を明らかにし得ないのは、このような階層化のためであろうと主張する著者の考えに、私は全面的に賛成する。

この書物は、単に音楽というヒトに固有の表現行動の脳機構を論じたものではなく、ヒトの精神活動、そしてそこから生じる社会的行動の脳科学を理解するための研究の新たな方向性を示しているという点において、脳科学に興味を抱くすべての人々に読んでいただきたい良書であると思う。

A5 頁168 2013年

定価2,940円

(本体2,800円+税5%)

[ISBN978-4-260-01527-1]

医学書院刊